

# 十段物語



## 第7回

武徳会出身の麒麟児

たばた しょうたろう  
田畑 昇太郎

本橋 端奈子

「柔道の天才」として名を馳せる



田畑昇太郎十段

田畑昇太郎は明治17（1884）年4月6日、大阪府嶋下郡三宅村大字小坪井で生まれた。田畑の少年時代を物語る資料は少なく、ほとんど残っていない。ただ水泳の得意な子どもであったようである。

田畑の名が資料に見えるようになるのは、彼が京都中の秀才が集まる京都府第一中学校に入学した頃からとなる。府立一中に入学してすぐ、田畑はボート部に入部した。しかし、新入生ということもあってボート部

ではオールの後片付けばかりやらされていたという。明治32（1899）年、その水泳好きが高じて大日本武徳会水泳部に入門し、小堀流踏水術の修行も始めてみたものの、なかなかボートの練習をさせてもらえない状況には嫌気が差していた。そんな彼を、ある友人が柔道部の練習に誘う。このことが田畑の生涯を決定づける大きな転機となったのであった。そこで田畑は、まさに「柔道の天才」と呼ばれるにふさわしい天性の輝きを見せた。幼少の頃から好きだった水泳で身体が鍛えられていたのもあるのであろう。すっかり柔道の面白さに魅了された田畑は、講道館京都分場に正式に入門を願ひ出る。そして明治33（1900）年2月4日、講道館入門誓文帳に古式に則って血判を押し、晴れて講道館門下となったのである。田畑16歳の春であった。

講道館に入門してからの田畑は、

まさに驚異的なスピードで上達していったという。練習量も相当のもので、明治34（1901）年には既に初段格を許されるまでになっていた。

この頃の田畑の得意技は左跳腰で、まさに百発百中でよく利いたと語り継がれている。田畑の師は、明治32（1899）年から大日本武徳会最初の柔道教授となっていた磯貝一である。磯貝は、動作が柔らかく腰のバネが強い田畑には、早い時期から眼をかけていたようである。田畑を将来有望と睨んで、特に厳しい稽古を課した。田畑もまた、磯貝を慕い、よくその稽古に喰らいついて技を磨いた。磯貝と田畑が良い師弟関係を築いていたことは、以下の逸話から想像できる。

曾て柔道の稽古が終ると、夏など、京都名物の疎水へ泳ぎに行ったものだが、田畑昇太郎・大澤保三郎などは、柔道で自分にはり投げら

れた仕返しに水泳で盛に挑んで来た。自分が疎水端に立っていると、この連中が自分を水中に落そうと二三人で向って来るのだが、当時自分も三十歳そこその頃だ、何をやっても負けていない。反対にほり込んでやるというようなことだった。

柔道のかわりに得意の水泳で磯貝に挑んで、逆にやり込められる。とても微笑ましい逸話であり、お互いに篤い信頼を置いていたと思われる。田畑は、その磯貝のもてで修行を積み、着々と実力を付けていったのである。

明治37（1904）年2月、まだ京都では珍しかった中等学校同士の対抗試合が京都武徳殿において行われた。京都府立第一中学と京都師範学校との一戦である。これは、武徳会柔道教授である磯貝一が、「学生会柔道の進歩発達には、対抗試合の実

施が一番適切有効だ」と各関係者に説いて回って実現したものであった。初段格の田畑は、府立一中の大将として出場した。この試合の様子は、磯貝の回顧録に詳しい。

一中対師範の試合、この試合で、師範は何とかがして副将の柴田（安治郎）が大将田畑まで喰い込んで、田畑に対しては徹頭徹尾、ネバル作戦らしかった。勝負は一進一退だったが、俄然師範の中堅、田中慶太郎が奮戦四人を抜けば、続く岡田忠蔵またよく三人を屠りて注文通りとなった。併しこの時一中の副将角（善治）初段、憤然として立ち、阿修羅の如く荒れ廻り、六人の強豪を撫で斬って、副将柴田と引分けた。師範の作戦は裏切られて、遂に大将同士の決戦となった。こうなってはどうみても師範側の不利だ。しかし清水は少しも臆せず、堂々と背負・大外で勝負

すれば、田畑また得意の跳腰で応酬、暫しの間白熱戦が続けられたが、遂に田畑の冴えた左跳腰は、清水如何とも防げず、強豪師範も新鋭一中の軍門に降ったのである。

熱戦の中、田畑が得意中の得意技、左跳腰で勝利をもぎ取った様子が見て取れよう。また、同年5月に行われた第9回武徳祭演武大会では、中学5年生ながら出場を果し、見事神奈川県代表の五十嵐忠吉を破って武徳祭優等賞にあたる銀牌を授与されている。このような活躍ぶりを認められ、田畑は同年8月9日、20歳にして早くも二段に昇段するのであった。

### 武徳会柔道教師となる

この頃の二段といえは立派な先生格で、中学生同士の戦いでは、最早田畑に敵するものはいなくなっていた。

た。田畑は府立一中を卒業すると、

生活の糧をこの得意の柔道で賄おうと考え、柔道教師の道を歩むことを決意する。そして、誘いのあった宮崎県延岡中等学校に赴任することになったのであった。しかし、田畑に殊更眼をかけていた磯貝がこの赴任1件に口を挟んだ。田畑のような逸材をあたら田舎で朽ちさせるのは惜しい、ということと田畑を京都へ呼び戻したのである。そして、田畑に武徳会本部柔道助教の職を与え、自分の手許で更に育てることにしたのである。慕う師にこのような芳情をかけてもらった田畑の心情は如何ばかりであったであろうか。磯貝の想いに応えられるよう、更なる精進を誓ったに相違ない。また、京都に戻ったことを機に、田畑は京都政法大学の夜間部に入學し、勉学にも励むこととなる。そして、明治39（1906）年11月10日には22歳にして

三段への昇段を果したのである。

田畑の柔道は、その頭の良さもあってか理詰めで、その修行にはさまざま工夫を凝らしていた。投げられ方の稽古は投げる稽古よりも難しいと考え、家の庇や垣根の上、また学校にある横木の上に仰向けに寝転がり、そこから体をひねってうつ伏せや横向きに落ちる練習を繰り返し行っていたという。また、1メートル程の高さに縄を張り、それを飛び越えざまに宙返りをする、という練習まで熱心に行っていた。自分ばかりでなく、武徳会の生徒らにも縄跳びを課すなど、良いと思えば新しいことでもどんどん取り入れる性格であったようである。ただ教えてもらうだけでなく、それを自分なりに思考し体得する「自得」を座右の銘に掲げていた、田畑らしい修行ぶりであると言えよう。後に武道専門学校教師として田畑と同じ職場となる栗原民

雄<sup>12</sup>は、田畑の指導を以下のように振り返っている。

(田畑)先生の稽古は軽く、よく動き、体の運びによって相手を引張り回し、絶えず主導権を握り、作りつつ掛けるという理想的なやり方であった。お得意は内股、足車、小外刈などで、寝技は毛嫌いして全くされなかった。形はどれも御上手で、磯貝先生とよく古式の形をされたが、投の形が天下一品であったと思う。これは有段者となれば、だれでも知っている一般的な形であるが、先生のように、理論に合い、しかも迫真力のある形を演ずる人はほとんどいない。まさに名人技であった。(略)生徒の形の間違いを真似されるのが特にお上手で、お前のはこうなっていると一々悪い形を示して指導いただいた。ただお叱りを受けるのと異り、上手に真似されるので、

誰しも欠陥が明瞭にわかり、みるみる上達して行った。<sup>13</sup>

技・形の上手さは勿論、教え方も色々と工夫を凝らしていたことが読み取れよう。栗原いわく、当時の武道界は極めて封建的で、師や先輩の言葉は是非を問わず飲み込まなければならぬような風潮があったらしい。そのような中で、一人田畑だけは違っており、若い者の意見も良く聞き、正しいと思えば自分の非を認めることを恐れなかった。それだけ器の大きい人間性を持ち合わせていたのであろう。そんな田畑を慕い、武徳会の生徒などはよく田畑のもとに集っていたという。

徳三宝との世紀の一戦

明治44(1911)年5月4日より5日間、大日本武徳会による恒例の第16回武徳祭及び大演武会が催された。総裁に伏見宮を仰ぐ、当時日本最大の武道大会である。この大会において、東京で日の出の勢いで活躍していた鬼・徳三宝<sup>14</sup>と、関西を背負って立つ存在になっていた田畑との特選乱取が組まれることとなった。この乱取に先立つこと2年、田畑は明治42(1909)年の青年大会において、柔道家の生命線とも言える左膝関節を負傷し、一時は再起不能とまで言われていた。しかし幸いにも治る見込みが立ち、この試合を受けて立ったのであった。

試合当日朝まだきから押寄せる人の波、午前中にはさしも広き会場も鮎詰にして余す処がなかった。

(略)勝負は二本勝負、審判は現

講道館指南役磯貝十段である。呼ばるるまま徳は東、田畑は西の武者溜りから静かに場内に入る。徳は此の時二十三歳、五尺七寸、二十二貫、均斉の取れた鉄軀は逞しきまで発達して一つの贅肉もない。対士田畑も軀幹長大、漆黒の長髪を半バックに分け、颯爽としてこれに対す。両士、一礼して立つ。徳、無造作に大股でススッと進み行き、徳一流の極端な右自然体に組む。田畑も堅壁の姿勢でこれは徳と正反対の左自然体を取る。右と左、右技と左技、技術からして体勢からして面白い対照である。徳は先達鬼横山の感化を受け、円熟精妙の技術こそ先達に一籌を輸せんも、豪宕にして無尽の精力と強技は鬼横山すら舌を巻いていた。田畑は中学時代から磯貝十段に私淑しその左技の鋭技は天下無敵と言われ関西麒麟児の評があった。

この勝負、徳か？田畑？知る人も知らぬ人も固唾を飲んで凝視する。徳、無造作に組んだ右自然体から、得意の右の体落に入らんとし、大胆にも、左自然体で堅陣を張る田畑をグッと前に引き寄せて一気に右体落の大技を放さんとした。然しこれは徳として余り賢明な策ではなかった。何故ならば田畑は左姿勢で左技、そしてなかなか技も利くが頭も利く男。徳がグッと前に引きよせ気味に來たその力に乗りつつ、軽く這入って鋭く切った左大外刈の巨弾、気合と呼吸とが合したからたまらない。大豪、徳、その巨体は空を廻ってモンドリ打って落つ。磯貝審判「一本」と宣言。(略)更に二本目の勝負が宣された。二本目に立ち上った徳の形相は物凄かった。よほど癪にさわったと見え、怒気と殺気と錯綜して、猛然と田畑に襲いかかった。(略)

凄気合とカケ声が徳の口から迸る、それが飛沫となって京都名物西山時雨じゃないが田畑の面上に飛ぶ。これには流石の田畑もよほどこたえたと思え、左姿勢に頑張ったまま顔も上げ得ず、ただ徳の鋭鋒を避けるのみ、徳もさっきの田畑の大外刈は随分こたえたと見え、二本目は攻撃の中にも少しの油断もしない。(略)田畑も今度は容易に技をかけない、亦かける機会もないようだ。寧ろ頑張り通して前の大外刈に物を言わせる賢策？気配さえ見えた。徳はまごまごして時を過ごせば田畑の術中に陥り、惨敗は必定、それではおいどんの西郷どんに申訳がナカバイとでも思ったのか、攻撃につぐ攻撃、虎を市に放ったという譬喩はあんな場面を形容したものであろう。そして徳が徹頭徹尾守勢にある田畑の堅塁も物かはとばかり前に引け

ば、田畑も聊か浮足立って片膝ついた折も折、得たりとばかり無二無三に引き立て引き廻し、田畑の精力つきるを見て、寧猛体落の強撃、己れの股も張り裂けんばかりに広く低く踏込んで、引っかつぎざま寺小屋方式に記録して居たその机の上に碎けとばかり叩きつけた。鈴は飛び、机はこわれ、実に壮烈無比言語に絶する大技である。

磯貝審判「一本」と宣した。<sup>18</sup>

田畑の左大外刈が見事決まり一本、しかしこれに怒り狂った徳が放った力任せの体落が田畑を場外の机にまで投げ飛ばし一本ずつとなる。田畑はこの時、先年痛めた膝を打ったのか、足を引きずりながら悲壮な面持ちで試合を続けたという。しばらく組み合った後、審判の磯貝が「引き分け」を宣言し、ここに世紀の一戦は幕となったのであった。この乱取を振り返り、磯貝は後に「左膝関節

の負傷さえなかったら、2本目の徳の体落も必ず堪え逐せただろう」と語っていたという。この試合は当大人気実力共随一の柔道家同士の対戦であったということもあり、後々にまで語り草となった。そして関西の磯貝の跡に田畑あり、という評価を決定づけた一戦であったともいえるであろう。

明治45（1912）年1月8日の鏡開式において、田畑は五段へと昇段する。また同時に武道専門学校の教授職を任じられ、磯貝の跡を引き継ぎ武専の中心的存在としてその任に当たることとなるのであった。この時期、武専以外にも、同志社大学の柔道部師範や住友合資会社柔道部師範なども歴任している。また、あまり知られていないことだが、田畑は柔道と並行して水泳の修行もつけており、武徳会水泳教士号をも持っていた。実際武徳会の水泳主任教師

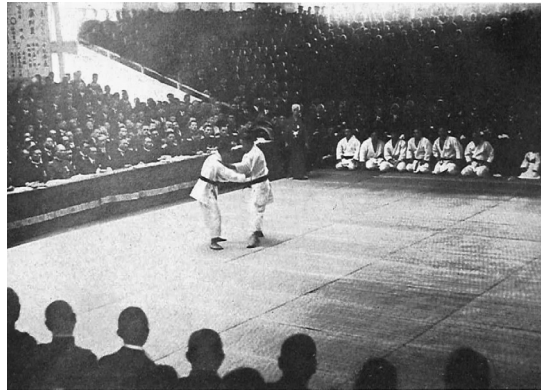
を昭和14（1939）年まで兼ねていたほど水泳にも長じていた、特異な人物であった。

### 天覧試合とその晩年

田畑には、もうひとつ後世にまで語り継がれる大試合がある。昭和9（1934）年5月5日に済寧館において行われた、皇太子御誕生奉祝天覧武道大会での三船久蔵との特選乱取である。すでに50歳になっていた田畑であったが、このめでたき場を人生最後の試合と定めて万全の態勢で臨んだという。対する三船も天覧の光栄に浴する身、同じ気持であったであろうが、不幸にも直前に大病にかかってしまい、半死半生の状態で当日を迎えることとなった。試合の様子を以下に引用する。

久しく所労で憔悴した三船八段、特選々士の栄を担うや、倒れて後止むの悲壮な決心を以て出場した。

対士は関西柔道界の重鎮田畑昇太郎八段。所謂特選中の特選である。俊豪田畑と精妙三船の一戦である。息詰る空気を破って互に対す。三船軽快なる右自然体に組めば、田畑も颯爽たる左自然体を取る。両士正しく組み四五歩動作する中、三船左手深く田畑の右袖を軽く取れば、田畑も上より三船の右袖を強く絞る。何れも周到な取口である。田畑得意の左技に入らんとして軽く前隅に引けば、三船引かるるまま絶妙な足払を放つ。田畑自然体のまま之を防ぎ、釣込足を掛くれば、三船体勢崩れしも、素早く直る。田畑更に左大外の強襲を浴せんとするも、三船右手を以て軽く制し、彼一流の巴投に行く。田畑、やや崩れしも、中腰になりて防ぎ互に立つ。田畑、左右の釣込足をかくれば、三船それを避けつつ隅落の妙技を放つ。田畑体を



昭和9年天覧試合にて、三船久蔵との乱取（右・田畑）

落して防ぎ、三船が本体を取らんとする処を重ねて強き釣込足に、三船打伏となり防ぎ、立直る処を続けて右膝車に出づ、三船又しても打伏の姿勢となる。両士秘術をつくして、攻防大いに努む。田畑、氣勢鋭く足払をくれて、鋭き小内刈をかくれば、三船やや崩れて腰

を落せしも、立ちつつ、三船特有の踵返の一手（右手で田畑の右足踵を取って倒す技）、意外の奇襲に、田畑ドスンと腰を落す。かくて両士立ち、互に利手に組む。凄きまでに緊張せる両士の顔面は、一抹の殺気さえ帯び、場内鬼気迫るを覚ゆ。両士、往年の意気悠然として火を吐くかの如し、田畑立つなり、浮落、捨身、釣込腰、足払の手技、足技を釣瓶打つるべうちに放つ。技、頗る烈し。三船、田畑の強技に体を落し、立ちては防ぎ、防ぎては攻め、矮小瘦躯の身を、巧みに進退す。田畑に攻撃の鋭あれば、三船に防禦の妙がある。互に技術の玄妙を現わして、タイムとなる。攻防一味と云う名試合であった。<sup>20</sup>あくまで乱取であるので、勝敗をつけるものではないが、お互いが死力を尽して技を出し合った様子が見て取れるであろう。

田畑は大正8（1919）年11月7日には六段、大正15（1926）年11月1日に七段、昭和7（1932）年11月20日には八段と順調に段を重ねていった。ほとんどの年月を京都で過ごしているため、東京に本拠を置く講道館師範である嘉納治五郎とはあまり深い繋がりは無かったようである。ただ、田畑が師と仰ぐ磯貝が、武徳祭の折などで来京した嘉納師範の前に出ると、厳父に接する子供のように緊張し、また敬慕しているのを見るにつけ、やはり嘉納師範の偉大さに感じ入らずにはいられなかったという。

昭和12（1937）年12月22日、次年の鏡開式に先立って講道館において昇段式が執り行われた。この昇段式では、磯貝一・永岡秀一が十段へ、飯塚国三郎・佐村嘉一郎・三船久蔵<sup>21</sup>として田畑昇太郎が九段へと、高段者が軒並み昇段を果した。この半年後太平洋上にて客死する嘉納師範の、次代の柔道界を担う者たちへの最後の置き土産であったと言えるであろうか。田畑自身もこの期待を重く受け止め、関西柔道界を牽引する任への決意を新たにしたことであろう。

昭和13（1938）年5月、嘉納師範が急逝し、南郷次郎が第2代館長として講道館の運営を行っていくことになる。田畑のもとに南郷館長から講道館指南役着任の要請が届く。田畑は、自分はその器ではない、と再三固辞したが、講道館の将来や故・嘉納師範を想い、遂にこれを受けると決意した。そして「講道館指南役トシテ尽力可相成者也」<sup>22</sup>の辞令をもって、昭和15（1940）年4月に講道館門人の最高職ともいえる指南役に着任したのであった。54歳のことである。

しかしその後間もなく勃発した第

2次世界大戦は、柔道界にも大きな混乱をもたらす。講道館も大日本武徳会も、時の政府の外郭団体に組み込まれ、軍事色を強めざるを得ない状況になっていった。田畑が育てた門人も多くが出征していった。そんな中であって田畑は、ある出征した門人・若林文吾七段の勤務先であった京都大谷中等学校の授業を何年間にも亘って代わりに受け持ち、その俸給全てを留守宅に届けていたという。田畑の、門人への温情が伝わる美談であろう。

そして、昭和21（1946）年11月、GHQによりとうとう武徳会は解散を命じられたのであった。<sup>23</sup>武徳会の解散によって下部組織であった武専も当然閉校となり、武徳会関係者が数万人も公職から追放されることとなった。この解散を見て田畑の師・磯貝は、自分の役目は既に終わったと感じ柔道界からの引退を決意す



る。そして引き際を心得ていたかのように急逝するのであった。あとに残された田畑は、その事後処理や戦地から引き揚げてきた門人らの世話など、苦悩の日々を強いられることとなる。昭和23（1948）年、柔道有段者会が発展的解散をして新たに各都道府県連盟が順次組織されていった。田畑は、その京都府柔道連盟の初代会長に就任し、戦後の関西柔道復興に尽力するも、やはり随分苦勞をしたようである。<sup>24</sup>

昭和23（1948）年5月4日、嘉納師範の10周忌法要に際して、十段への昇段を許されるも、その苦悩が晴れることはなかった。そして、その責任感ゆえの心労がたたってか、昭和25（1950）年5月25日、心筋梗塞によって急逝するのであった。享年66歳。まだ若い田畑の急死を柔道界の誰もが惜しんだという。<sup>25</sup>

\*引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

《主要参考文献》

- 『わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟社東海支部発行 昭和15年
- 《その他典拠・註》
- 1 講道館所蔵「入門誓文帳」より。現在の茨木市小坪井
- 2 後の京都府立洛北高等学校。一中、三高、京大という進学階梯がエリートコースとされていた。
- 3 『皇太子殿下御誕生奉祝昭和展覧試合』大日本雄弁会講談社発行 昭和9年
- 4 後の十段。嘉納師範の命を受け、京都に講道館柔道を広めるために派遣されていた。
- 5 『実録柔道三國志』原康史著 東京スポーツ新聞社
- 6 『わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟社東海支部発行 昭和15年
- 7 『わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟社東海支部発行 昭和15年
- 8 立命館大学の前身
- 9 『柔道新聞』第95号（昭和30年6月20日）
- 10 『読売新聞』昭和16年2月22日
- 11 「田畑六段曰く」『柔道界』第1巻第5号（大正11年8月）
- 12 後の十段
- 13 「柔道新聞」第138号（昭和32年1月20日）
- 14 後の九段。昭和20年東京大空襲で逝去
- 15 昭和14年『大日本柔道史』発行当時。
- 16 控えの場
- 17 やや劣る
- 18 『大日本柔道史』丸山三造著 講道館発行（昭和14年）
- 19 武徳会における範士に次ぐ称号
- 20 前掲註15参照
- 21 3名とも後の十段
- 22 「新指南役 田畑氏の挨拶」『柔道』第11巻第5号（昭和15年5月）
- 23 「武専 その発足から解散まで」『近代柔道』2巻3号（昭和55年3月）
- 24 「十段物語」『柔道』第36巻第5号（昭和40年5月）
- 25 「田畑君を偲ぶ」『柔道』第21巻第8号（昭和25年8月）
1. 講道館柔道資料館殿堂より
2. 『皇太子殿下御誕生奉祝 昭和天覧試合』昭和9年 大日本雄弁会講談社発行